

科目名	三絃実技 I ～VIII	形態	実習	開講期	春・秋
担当教員	実技担当教員	単位	1	年次	1, 2, 3, 4

### ＝授業科目の目標＝

箏と同じく、八橋からの 400 年間に伝承された曲の中、将来演奏家及び指導者として必要な曲を中心として、特に初心者には演奏のイロハから教える。(三絃は基礎を身につければ、後は応用力でカバーしていける楽器故)ほとんどの学生が初心者で入学してくるため、この基礎力をつけることを最大目標とする。

### ＝履修の条件と学習の方法＝

学ぶのに一番良い方法は教員の演奏を目に刻み、音を聞き分ける事が必要である為、小さい曲もしくは部分的に暗譜をして、教員の手付を見る事ができる様にする。

撥は 2 年次までは先継べつ甲で可。3 年次は進級時まで丸撥（象牙）を用意する事。

### ＝授業内容＝

(1 年次)

1 期 初心者については宮城道雄の「三絃小曲集」から始める。三絃という楽器は基礎さえ出来れば飛躍的に技術の向上を図れる楽器の為、初心者こそ、型とリラックスを徹底的に指導する。

経験者には小規模の「手事物」を与え、唄と奏法の両法の熟達を目指す。

2 期 小規模の「手事物」を中心に指導する。経験者には中規模の「手事物」と宮城作品の小品に挑戦させる。この事によって巾広い奏法の進展と発見を促す。

(2 年次)

3 期 「手事物」の地唄を主に合奏の形式で習得させる。文化文政期に盛んに作曲された球玉の作品群を主として習得させる。

4 期 3 期とほぼ同じ内容であるが、曲は徐々に高度な曲へと発展する。

(3 年次)

5 期 この期から宮城作品を中心にしてテクニックの向上を目指す。箏も三絃も宮城作品は古典の基礎の上に立って初めて弾きこなす事が可能な曲であり、また、その奏法、テクニックは将来現代邦楽を弾く事の前提条件ともなる曲である。

6 期 5 期に引き続き宮城作品を主とするが、秋の定期演奏会には必ず 1 曲は三絃曲を取り入れる事とし、公開の舞台での姿勢、演奏マナーに関しても指導していくものとする。

(4 年次)

7 期 卒業後を見据えての授業となる。古典曲の必須曲を中心に、また、演奏家指導者として習得すべき曲を出来るだけ多く学ばせる。

8 期 秋の定演、卒業演奏にふさわしい曲の選考にあたり、各人の特性が生かされる様に配慮するものである。

### ＝成績評価の方法と評価の基準＝

正しい奏法、正しい発声法が身についているかを第一条件にして評価する。三絃は正しい姿勢を身につける事が上達の秘訣である事から、リラックスが正しく出来ているかが最大ポイントともなる。

### ＝その他＝

特になし